

同窓会会報

題字・村上孝夫先生

薬学部同窓会誌によせて

東京理科大学理事長 橋高 重義



本学に薬学部が設置されてから28年となり、卒業生数は約4200名に達しています。創設当時新進気鋭の教授も定年を迎えるようになりました。

この間、教員その他関係者の努力と優秀な卒業生の社会における活躍の結果、我国における薬学系大学のなかでも高い評価を得るに至り、本学薬学部志望生も非常に優秀な学生が集まるようになってきました。

今後ますます科学技術が高度化し、また高齢化社会となるにしたがって、人間の健康保持がより以上に重視される時代になってゆくと思われまふ。このような新しい

時代に適応した新しい薬学分野の教育研究が重要となる今、本学で計画されている薬学と生物系学科との連携による「ライフサイエンス系研究所」における薬学分野の研究の発展を期待しております。今般、薬学部卒業生が、理窓会の下部組織として薬学部同窓会を発足せられたことは意義あることと思ひます。

学部長就任にあたって

薬学部長 久保田 和彦



卒業生の皆さんが力をあわせて本学の発展と相互の懇親を図られるよう、希望いたします。

★広報部から…同窓会設立にあたり、橋高重義理事長先生よりお祝いの言葉をいただきましたが、都合により創刊号に掲載することができませんでした。遅ればせながら本号でご紹介致します。

薬学部同窓の皆さん、ご機嫌いかがですか。

私はこの十月一日付で薬学部長の要職を仰せつかり、今薬学部の将来をいかにすべきかについて模索し始めております。同窓の皆さんに学部長就任の挨拶を兼ねて、薬学部を中心に、本学の現状と課題について述べてみたいと思ひます。

薬学部は創立以来二十九年を経ましたが、今年は人事面で大きな動きがありました。本年三月末日付で村上孝夫教授(植物化学)と長沢元夫教授(生薬学)が停年を迎えられました。さらに先般、梅沢文輔教授(薬化学)が急逝されました。村上先生は薬学部創設と同時に教授として赴任され、薬学部長や理事を歴任され、薬学部の発展と基礎固めに多大な貢献をされました。また二十五周年記念事業でも大きな功績を残されました。長沢先生も学部長として多くの改革を成し遂げられ、野田の薬草園を整備されるなど、長年月にわたって薬学部のために尽力されました。梅沢先生は温厚な人柄でありながら決断に優れ、学部長時代には畏敬すべき手腕を発揮されたことは、まだ記憶に新しいところでありまふ。このような偉大な三教授が去られたことは薬学部として大きな損失です。

さて、本学は野田地区に基礎工学部の校舎と食堂が建設され、長万部校舎と合せて完成の域に達しました。長万部校舎と同じ手焼きの赤レンガを張り、緑の木立の中に夕陽のような鮮やかな建物が美しい対比をなしています。また野田の特別教室(セミナーハウス)の隣りに現在ライフサイエンス系研究所建設中で、来春三月末に完成します。この研究所は斬新な構

想で作られ、産学共同研究を重視してきます。最新の高精密測定機器をフル装備して、世界にその名を馳せる研究所を目指しています。

ここで注目すべきは、この研究所に薬学部生物系教授陣が参画している点です。この研究所の活動を通じて薬学部の研究面での発展と飛躍が期待されます。薬理学、生薬学、物理化学教室などは、大学院博士課程新設のため、野田に主力または一部を移転させました

が、これまで神楽坂と分離され、共通大型機器やラジオアイソトープ施設の利用が困難でした。しかし、研究所の施設、設備が来年から利用できることになるので、神楽坂地区以上に研究条件が整備されることになり、研究促進が期待されます。

現在薬学部の学部在生は一学

年およそ二百名で、特に変化はありませんが、大学院修士課程は一年五十名に定員が増員され、大学院の学生数が大幅に増えてきました。薬学部は十号館が二十五周年記念事業として建設され、学部学生の教育・厚生環境は見違えるほど改善されていますが、研究室のある五号館（薬学部本館）は近年老朽化が目立ち始め、地盤の沈下などが見られるようになって

います。近い将来に本格的な対策が必要と私は考えています。以上薬学部の現状を人的・物的両面から概観してきましたが、人的諸条件については、ここでは触れていない極めて解決困難な諸課題が山積しており、学部長の責務の重大さを改めて痛感しているところでもあります。

薬学部は来年三十周年を迎えます

村上孝夫教授

学術講演会

昭和63年9月3日、東京理科大学薬学部同窓会総会に引き続き、本学記念講堂（1号館17階）において村上孝夫先生（植物化学）を演者にお迎えして、「顧みて」と題して学術講演会が開催されました

た。参加者は、先生の長年にわたる輝かしい研究成果と様々の思い出話に耳を傾けました。紙面の都合によりご講演のダイジェストを掲載致します。

☆ ☆ ☆

す。新しい節目にさしかかる訳ですが、これまで先輩が築いて下さった輝かしい伝統の基盤の上に立って、さらに薬学部を教育・研究の両面で発展・向上させ、この伝統をさらにゆるぎないものに育成していくよう最大の努力を傾注したいと考えています。

「顧みて」研究回顧

村上 孝夫



私は本学の薬学部にならぶ学部創設の年、昭和35年4月に1回生と同時に参りました。それまでは飯田橋駅に降りたこともありませんでしたし、まして理大がどこにあるかも知らなかったのですが、最初来た時には駅の売店で理大はどこ？ と尋ねたことを覚えております。爾来、28年という歳月が、

したので意を強くしています。今日、大学は以前にも増して社会にその窓を開くよう望まれています。東京理科大学薬学講座も本学の生涯教育の一環として既に四回行われてきましたが、同窓と大それた結びつきは一層緊密になることが予想されます。同窓の皆さんの倍旧のご協力とご支援を切にお願い致します。

◇ ◇ ◇

あっという間に過ぎ去ったように思われます。一緒に着任した先生方も他大学へ、あるいは研究所へ転出され、あるいは定年で大学を去ってゆかれまして、開設時に教授として赴任してきたのは、私が最後の一人ではなかったかと思えます。私もこの3月に定年を迎えます。私、薬学部を離れました。私としては創立時から薬学部の伝統を築く一翼を担うことができて、大変幸福であったと思っています。本日は学術講演ということをごさいますので、前置きはこの位にさせていただきます。

り生理活性を持ったリード化合物を目標にして天然物の化学的研究を進めたわけであります。その二、三を紹介させていただきますと、ある企業と共同して行った、抗炎症剤の研究もその一つであります。抗炎症剤に使うと思われる生薬約50種類を古文獻から選り、それらのカラゲニン浮腫の抑制効果を調べ、その中から特に活性の著しいラン科の植物セッコクの抗炎症活性成分を、生理活性をメルクマールにしながら分離していったわけであります。そして最後に多糖体を分離いたしました。この多糖体がカラゲニン、あるいはホルマリニンなどによる浮腫を著しく抑制することが分かりまして、セッコクの有効成分の抽出法、ということ、パテントをとるところまでいって、でございますが、残念ながらパライロジェン（発熱性物質）との分離ができなかった、というよりも活性の多糖体自体がバイロジェンではなかったかというようなこともございまして、実用化には至りませんでした。それから抗腫瘍性を持つ物質の分離を目標といたしまして、高山植物のサンカヨウの成分の研究を行いました。このサンカヨウはポドフィロトキシン——現在ポドフィロトキシンの誘導体（商品名プロレジド）が実際に癌の治療に使われていますが——とその関連化合物を含有する

日本産の植物では数少ないものの一つであることが分かりました。そしてサンカヨウから新しいリグナン化合物(4-フェニルナフタレン骨格に五員環ラクTONの結合した新しいタイプ)を分離いたしました、学名にちなんで *alphyllin* という名前を付けて、構造式を提出したのですが、当時はスペクトルとしても紫外線吸収スペクトル、赤外線吸収スペクトルぐらいいしさがございませんでしたので、私達の提出しました式に今一つ決定的な論拠が欠けていましたが、内外の二、三の学者グループが合成研究を行いました、結局阪大の堀教授らによりまして、*biogenetic* ナルトによる合成が行われ、私達の提出しました式は、五員環ラクTONの結合の仕方が逆だというのがわかりました。この化合物はやはりポドフィロトキシンなどと同じように抗腫瘍性があることが確認されました(6-mercapto-purine の2倍の活性、 ED_{50} (KB) $\approx 1.0 \mu\text{g/ml}$)。その他高山植物のシラネアオイ、これはキンポウゲ科の一属一種、日本特産の植物でございます。それからメギ科のルイヨウボタン、漢薬のメナモミ、オナモミ、これらは多摩川の土手などにも生えているキク科の植物ですが、これらの成分の化学的研究を行いました。そのほか、生薬の水溶性成分の研究など、

いずれも最初述べましたように、生理活性を持つリード化合物を見つけることを目標に行った研究であります。

しかし、こういう研究は一発勝負的なところがございまして、当たるも八卦当たらぬも八卦で、やってみなければ分からないし、当たらないければそれで済みません。また一つ一つの研究に関連性がないために、研究を重ねても、発展が期待されない。どうもこのあたり企業と違って、大学、特に私達の様にスタッフの少ない研究室での天然物研究の悩みがあるわけです。やる以上は一貫して、それなりのフィロソフィーも夢もあって、存在感のある研究をやらなければならぬのではないかと思っております。

昭和40年(1965年)頃から、先に述べました研究のほかに、オバノイノモトソウというシダの成分の研究もやっております。このシダは漢薬名を大葉鳳尾草といて、主として黄疸型肝炎、下痢、水腫などの治療に使われると中薬誌に記載されているものです。このシダをメタノールで抽出いたしました、当時はアルミナのクロマトぐらいいしかなかったわけですが、アルミナのクロマトあるいは再結晶を繰り返すことによって、とにかく数種類の無色の結晶が得られました。これらの化合物は後

になって、*anti-taurate* 系のジテルペンであることが分かったのであります、その当時は先ほど申しましたように、スペクトルとしてはUV、そしてIRしかない時代でございます、構造研究もなかなか思うように進捗せず、一年ぐらいいはその基本骨格構造も明らかになることができなかったわけでありまして、今でこそ各種のクロマトグラフィー、最近では本学にも500MHzの超電導のNMR、あるいは¹³C-NMR、マススペクトルなど各種のスペクトルが導入されまして、天然物の研究方法も大きく変化しました。本学に100MHzの¹H-NMRの装置が入って、使えるようになったのは、昭和45年(1970年)の春頃からのことでございます、この頃から構造研究も一段と加速されるようになったわけです。その当時、シダを研究している人は日本でも数少なく、昭和薬科大学の上田教授ぐらいいしものでございました。シダは普通の人はあまりやらない、というのは、一つは分類が素人には難しく、集めにくいと言いうこともございまして、何分シダの生育している場所は、高温多湿のところが多くて、日本ではハブとかマムシ、台湾では百步蛇とかアオハブなどの毒ヘビにお目にかかる機会が多いわけです。恐らくそのようなこともあって、シダを研究の

対象とする人が少なかったのではないかと思えます。しかしシダ類は後で触れますけれども、天然物化学の領域では誰かがやらなければならぬ分野の一つでございます、私は多少反逆児的なところがございまして、誰もやろうとしないことをやるのが、私の性格に合っていたということがあるのかも知れませんが、1970年頃から本格的にシダの研究を始めて、段々とシダにのめり込んでいったわけでありまして。

シダ類の成分に関する研究としては、オシダ(綿馬根)とその関連シダ類のアシルフロログルシニン誘導体の化学とケモタキソノミーに関する研究、昆虫変態ホルモンとその分布に関する研究、最近ではワラビの発癌物質に関する研究などが知られる程度で、シダ類は今まであまり研究されていません。また、このような研究は特殊の化合物群に限られています。

さらに、シダ類を植物進化の面からみますと、海産植物が陸地に打ち上げられ、それが段々陸上の奥深く入って行きながら、現在のシダ類に進化したといった言われられておりまして、ちょうど陸上植物と海産植物の中間的な進化の段階にあるものと思われまして。今までは医薬資源として種子植物が広く研究されてきましたが、最近では海産動植物が研究開発の対象になって

います。植物進化の立場からいえば、種子植物からシダ類を通り越して一足跳びに海産植物に医薬資源を求めるといいうやり方をしているわけで、医薬資源的な意味からも、当然興味をもたれてよい植物群ですが、今までは余り関心を持たれなかったということになります。

さてシダ類の分類は、学者によって色々見解がわかれています。科の数だけから見ても、少ないもので12、多いものは50もの科に分けられていて、いかにシダ類の分類に問題があるか、うなずけるわけです。一般に植物の分類は、例えば毛があるかないか、あるいは鱗片があるかないかというふうに、二者択一的に行われるので、種の検索という意味では優れているかもしれないが、分類の基準として何を優先させるか、即ち形質の重要度の評価の違いによって、違ったグループ分けができるわけですね。また一つの形質だけ、例えば外部形態だけを分類の指標としますと、植物の種の間にある真の類縁関係とは関係のない人為的な分類ができあがるわけです。これに対して分類の基準として外部形態だけではなくて、内部形態、より客観的なデータとして染色体の数や形のほかに、含有成分(二次代謝産物)などもあわせて考慮すれば、進化の系統、ある

いは進化のレベルを、より客観的に理解することができるのではないかと考えたわけです。しかしこのような系統と進化を踏まえた自然分類に役立つ形質としての二次代謝産物は、何が適当であるかは、やはり広範なシダ類について成分の研究を行って、初めて特定できるわけです。ところで、ケモタキソノミーは成分によって種の区別をすることとされている人が多いようですが、私はむしろ種と種間の類縁関係（共通の chemical feature）を明らかにして、それを更に属や科のレベルまで発展させることではないかと思っています。したがってフラボノイド、特にフラボノールの様にシダ類に普遍的に分布する化合物は、形質として適当とは思われません。

我々は今までに約200種類以上、特にコーブランドのイノモトソウ科のシダについては、26属、90種類に近いシダの成分の検索を行って、シダ類の成分の概観をある程度つかむことができたと思っております。

す。そこで本日は、イノモトソウ科を中心に、科あるいは属のレベルでの進化と系統について、時間の許す範囲でお話したいと思えます。

本論の内容は生薬学雑誌の総説「二次代謝産物によるシダ類の系統と進化に関する研究」(第42巻、171(1989))を御参照下さい。

以上のように我々はシダの分類に関していくつかの問題を提起いたしました。そしておそらくこれから分類の専門家から、いろいろご意見をいただけるのではないかと期待しております。

この講演では時間の都合もございましたので、研究に携わった方達の名前をいちいち挙げませんでしたけれども、シダの一つ一つにこれらの人達の協力があつたことを、私としては銘記しているものであります。これで私の講演を終わらせていただきますが、最後までご静聴いただきましてどうも有難うございました。

「無題」

長沢 元夫

今年の三月に定年となり、二十四年間の勤務を終了したので何か書くようにとすめられました。私にとって不快なことが多かった

ので、精神衛生上過去をふりかえらないほうがよいと思ひ、別のことを書くことにします。同窓会の会報にふさわしくないことになり

ますが、その点はお許しをいただきたい。定年になったら始めようと思っていたことが二つあります。私はゴルフもしないし、テレビに野球の場面がでるとスイッチを切るくらいですから、ゲートボールをするつもりも全くありません。一つは素問と靈樞の研究で、これはもうはじめました。この紀元前の中国の医書には医学原論、病理学、生理学、針灸治療などのことが書かれています。針灸治療は三十年以上も前から勉強していましたが、古代中国の病理学と生理学をしらべてみたいと前から考えていました。このような古典の読み方は、訓語学でもだめ、宋学の方法でもだめ、陽明学でもだめ、考証学でもだめ、ということがわかってきましたので、江戸時代の研究書も、中国の研究書も物足りなくなってきたからです。これらの読み方をのりこえなければ臨床と結びつかないので、それを詳しく検討してみたいのです。これは大変時間のかかる仕事なので、これに手をつけることが出来るようになったことがうれしいのです。

もう一つは病気の治療と宗教の関係をしらべることです。私は三十年位前から手掌である種の病気の診断ができました。例えば肺結核で空洞のある人、浸潤のある人、肋膜の癒着している人などはその場所も、活動しているか、治っているかも正確に言いあてることができて、それで何人も漢方薬で治療した経験をもっています。活動している病巣に手掌を近づけると、手掌の中央にビリビリとした感じが生じて、過去にレントゲン写真で比較したことがあるので、その状態がすぐわかるのです。この能力にもし宗教的地域が加味されると一層強力になることに気がついたのがきっかけで、宗教の比較研究を前から進めていました。今では有名な宗教学者の著者でも、ここはおかしいとか、ここは正しいとかということがわかるようになって

梅澤文輔先生の想い出など

薬化学研究室 星野 修



梅澤文輔先生が特発性間質性肺炎という病気で昭和63年5月24日午後1時58分に急逝されたから、はや半年が過ぎました。講義など

りました。この研究も時間のかかるものですから、まだ検討しなければならぬ多くの文献が読めるようになったことは本当にうれしいものです。

私が早く学生の教育をやめたいのはこういう理由があるからです。単位がほしいだけという気持の学生に講義をするのがいやになってきました。やはり潮時なのでしよう。研究室や学生と別れてさみしいなどという気持がおきないことをこのような会報に書くのは失礼になるかもしれない。しかしジメジメした話よりは良いかもしれせんねえ。

で先生と親しく接していた同窓生の皆様には、この突然の出来事にさぞ驚かれたことと思います。先生には、教育・研究の意半ばにして倒れられ、その心中の無念さは察するにあまりあるものがあります。同窓会から梅澤先生について何か書くようにとの依頼がありましたので、20余年の間先生と共に過した想い出を拙文にまとめてみました。

先生は、福島県のお生れで旧制第二高等学校から東京大学医学部薬学科に進まれ、昭和23年3月に

同学科薬化学教室（故落合英二教授）をご卒業になり、研究生を経て昭和25年4月から昭和40年4月に本学薬学部教授として着任されるまで、九州大学医学部薬学科薬化学教室に助手（津田恭介教授）、助教（濱名政和教授）として奉職されました。

本学薬学部では、先生は故貴志二郎教授の後任として薬化学研究室を主宰され、有機化学（本年度より薬化学と改称）、薬化学実習（昭和46年度より有機化学実習に改称）を担当されておられたことは皆様の記憶の中に残っていることと思います。先生の講義は大きな声ではなかったようですが、学ぶ者の自主性を尊重する講義ではなかったかと思えます。温厚なご性格ですが、不勉強な者にとっては厳しい先生であったことでしょう。また、研究室では、実験の大切さをそれとなく教示されておられました。着任後間もなく全国的に大学紛争が起こり、薬学部もその火中となりましたが、その時期に先生は学生部委員になられて温柔的な態度で学生に接しておられた当時を想い出す人も多いのではないのでしょうか。

先生は、スポーツをあまり得意とされてはおられませんでした。研究室で毎年出かける夏・春の合宿には必ず参加され、若い院生や卒研生と一緒に山歩き。最近では

テニスやスキーとなったため山歩きはなくなったがーと地酒を酌み交すコンパを楽しまれました。お酒をこよなく愛していました。杯を重ねてもお酒に呑まれることはなく、相手になる自称酒豪の学生がつぶれるほどでした。

先生は学生時代の先輩や同級生から「ほとけの文ちゃん」の愛称で呼ばれていたそうで、その愛称の通り決して叱るようなことはなく、何時も童顔を思わせる笑顔で訪ねる人の話を聞き、相手の立場を考えながら助言などをされていました。

昭和57年10月から昭和61年9月までの4年間に互り薬学部長として学部運営の舵取りをされ、薬学部25周年記念事業の一環として薬学部10号館（毎年10月の第1日曜日に理大薬学講座が開催されている校舎）の建築にご尽力されましたことは皆様の記憶に新しいことでしょう。

先生は大変動物好きで、ご自宅の隣家の飼犬の散歩が先生の日課の一つになっておられたほどでした。また、史蹟や寺院に興味をもっておられて、最近では研究室の合宿地や学会会場の近くにある史蹟や寺院を必ず巡礼され、その知識の豊富さは驚くほどでした。入院される三日前の日曜日にも新座市にある平林寺にご自宅から歩いて何時もよく歩かれました。一行かれ

たそうですが、その時、これまでに疲れを感じたと話されていた。それが先生をおそった病気の自覚症状であったのかも知れません。

先生には、ご生前の教育・研究のご功績を称えて東京理科大学名誉教授の称号が授与されました。また、従五位勲四等旭日小綬章の叙位叙勲も受けられました。

第5期同期会のご報告

昭和63年5月14日に私学会館（市ヶ谷）におきまして第5期同期会を開催いたしましたところ、予想外に多くの同期生および恩師の方々のご出席を頂きました。同期生70名、恩師9名、同窓会より2名の80名をこえる大パーティーとなりました。

2ヶ月前より準備に入り、いよいよ当日です。

第一部の司会は畑さんと加藤優子が担当し、開会宣言は相川さん、同窓会5期生代表の五百川さんのあいさつに続き同窓会会長の小原侃さん、先生方より村上孝夫先生よりお言葉をいただきました。乾杯は市ヶ谷さんが音頭をとり、各先生方の自己紹介へと移り、第二部に入りました。司会は山田さんと福田さん（旧佐久間）にかわり同期生の都道府県別在住者紹介を

今、先生は、色々なことから離れて奥様と3人のお子様に見守られ、戒名教文院理岳輔導居士の佛様になられて、曹洞宗淨牧院（東久留米市）の墓地で安らかな眠りについておられることでしょう。数々のご懇篤なご指導とご教示を深く感謝いたしますと共に、先生のご冥福を心からお祈り申しあげます。

して前に並んでもらい写真をとりました。ピアノ音楽が入り、最後に全員で学生時代に流行した歌3曲（ブルーシャトル、学生時代、ラブユー東京）をピアノ伴奏で歌い、オブザーバーをしていたいただきました辰野高司先生に「ただいま一次会は閉会となりました。……というふうに進みましたが20年ぶりの再会で会場は話すがすぐワーワー、キャーキャーとあいさつがききとれないありさまでした。

二次会は神楽坂にあるクラブを用意しましたが、50名をこえる人々が二次会に移動し、ギターづめにすわっても幹事は立っている状態でした。水割り何十杯ビール、コーラ、おつまみを、どんだん作って出してもまにあわず、ここもワーワー、キャーキャーの

連続でおひらきになったのは次の日の3時をまわってました。

6月に幹事の打ちあげをやり、写真ができていたので卒業アルバムとてらしあわせて各々の名前と顔をむすびつけるのに、又、ワーワー、キャーキャーとさわいでやりました。野口さん（旧赤岩）と福田さん（旧佐久間）が会計を担当しましたので決算報告書も作りました。コピー等の準備があり10月に入ってから、出席者と欠席者全員（154名）に五期会報告白書と



名簿と写真を郵送いたしました。ご出席いただきました先生方9名（辰野高司先生、加藤百合子先生、久保田和彦先生、上野芳夫先生、近藤保先生、村上孝夫先生、石倉俊治先生、久保寺昭子先生、星野修先生）にも近況報告白書、名簿、写真を送らせていただきました。おいそがしいところをご出席いただきまして大変ありがとうございます

第4回 薬学講座開催さる

第4回東京理科大学薬学講座が、昭和63年10月2日理科大学10号館で薬学部主催のもとに開催された。他大学出身者も含め130名以上の参加があり、盛会であった。昼食時には久しぶりの再会に話がはずんでいるグループがあちこちで見受けられた。講師の先生とタイトルは下記のとおりであった（敬称略）。

- *エーザイ株式会社筑波研究所 鈴木 昇「バイオ技術による薬剤の近況」
 - *東京都老人医療センター神経内科 山之内 博「老年者の脳血管障害について」
 - *駒込病院感染症科前部長 南谷 幹夫「AIDSの現状と予防」
 - *東京理科大学教授 長沢 元夫
- 「注目される漢方」

ました。同窓会からは会長の小原侃さんと中村洋司さんにご出席をいただきました。ありがとうございます。（加藤優子記）

- 幹事 五百川武弘、市ヶ谷仁、加藤優子、野口貞子（旧赤岩）、畑義治、福田勝代（旧佐久間）、山田高久



薬学部ニュース

★退職

長沢元夫（生薬学）、村上孝夫（植物化学）の両教授は昭和63年3月31日をもって退職。引き続き長沢先生は薬学部嘱託教授として、村上先生は基礎工学部教授として精力的に研究・教育に携わっております。

★計報

薬学部教授梅澤文輔氏（薬化学）昭和63年5月24日逝去。

★学部長交代

任期満了に伴い滝谷昭司教授（分析化学）から久保田和彦教授（薬理学）に（昭和62年10月1日）。

東京理科大学薬学部同窓会 同窓会だより

入会のご案内

昭和63年9月3日現在、会費納入会員数は46名（内終身会員16名）です。この数は、薬学部卒業生の約1/10強です。種々の活動を行う上にも一人でも多くの卒業生にご入会いただき、しっかりした基盤を作りたいと願っておりますので皆様のご協力を切にお願い申し上げます。納入の際、住所氏名の他「卒業年次」も必ずご記入下さい。なお、郵便振替払込金受領証をもって領収書および入会手続き完了証にかえさせていただきます。

★投稿を待っています！

同窓会誌に掲載する原稿を募集しております。内容は自由です。同期会開催のニュース、会員の近況報告、エッセイ、などなんでも結構です。

お願い

同窓会名簿作成に着手することになりました。住所、勤務先、姓の変更などがありましたら、同窓会事務局までご連絡下さいますようお願い申し上げます。

★会報へ広告を！

会報に掲載する広告を募集中です。会報発行への賛助金としてご協力下されば幸いです。詳細は同窓会事務局まで（Tel. 〇三二六〇一六七二五）。

「東京理科大学 薬学部同窓会会報」

平成元年3月15日発行

〈非売品〉

編集 東京都新宿区市谷船河原町12
発行 東京理科大学薬学部同窓会
印刷・モリモト印刷株式会社